

「みなと町新潟の下駄作り」

森 行人

江戸時代の新潟町は日本海交通で栄えた湊町でした。蝦夷地からは豊富な海産物が移入され、新潟からは蝦夷地で消費される米や生活用品を移出していました。新潟町では、蝦夷地向けの塗り物や下駄作りを生産する手工業が盛んになりました。近世から近代にかけての蝦夷地(北海道)へ向けた加工貿易は、湊町新潟の特徴の一つです。

下駄は、安政五(一八五八)年の資料によれば、岩船や周辺地域から材料を入手し、新潟町で加工し、製品は松前や南部、庄内、江戸などへ販売していました(「新潟表産物類取調書」)。下駄の生産量は、江戸後期には年産一〇〇万足を越えていました。新潟の下駄産業の沿革は、風間正太郎『新潟履物沿革』一九三二年にまとめられています。しかし、下駄職人の具体的な仕事の仕方や下駄作りの具体的な様相については詳しくはわかっていません。



写真に示した資料は、新潟市内の下駄職人広川広次氏が、毎日の仕事内容

期間	始	終	仕事先	主な仕事内容
1	(?)	(?)	(?)	糸子挽・玉切・カンナケ
2	1月29日	2月11日	堀倉	糸子挽
3	2月19日	2月28日	浅田工場	カマシ
4	3月2日	3月21日	(浅田工場?)	ハシノ入手間・糸子挽
5	4月1日	4月8日	浅田工場	手間
6	4月7日	4月16日	徳吉工場	木挽
7	4月17日	5月1日	浅田 龍蔵工場	糸子挽
8	5月2日	5月14日	(浅田 龍蔵工場?)	糸子挽
9	5月16日	6月1日	(浅田 龍蔵工場?)	糸子挽
10	6月1日	6月30日	(浅田 龍蔵工場?)	糸子挽
11	7月2日	7月13日	(浅田 龍蔵工場?)	木挽・糸子挽
12	7月17日	7月19日	浅田 龍蔵工場	糸子挽
13	7月20日	7月26日	成田 康吉工場	糸子挽
14	7月29日	7月31日	(成田 龍蔵工場?)	糸子挽
15	8月2日	8月15日	浅田工場	糸子挽 七分、道具直し
16	8月15日	8月31日	(浅田工場?)	小紐
17	9月1日	9月15日	浅田工場	小紐
18	(?)	(?)	徳吉	小紐
19	(?)	(?)	松浦	小紐
20	(?)	(?)	浅田	(?)
21	10月1日	10月3日	浅田工場	糸子挽
22	10月4日	10月9日	浅田工場	糸子挽
23	10月10日	10月15日	浅田工場	糸子挽
24	10月31日	11月15日	浅田工場	糸子挽
25	(?)	(?)	浅田	(?)
26	11月15日	11月21日	(浅田?)	糸子挽
27	11月22日	11月31日	(?)	糸子挽 七分
28	11月1日	11月11日	(?)	糸子挽
29	11月13日	11月14日	(?)	紐日光
30	11月15日	11月30日	(?)	並日光・紐日光・大天目
31	12月2日	12月9日	(?)	並日光

表1 広川氏の仕事の記録(大正15年を抜粋)
*(?)は記載なし。(名称?)は連続した記載による推定。
**期間は休業日を含む

と仕事量、収入額等を書きとめたものです。記録は、一九二四(一九二六)大正十三(十五年)の三年間と短く、新潟の下駄作りにとっては新しい時期の資料です。また、当時の広川氏は二十代初めのまだ若い職人でした。こうした制約はあるものの、この資料は下駄職人の働き方を知ることができる貴重な資料です。

資料には、広川氏が「工場」へ出勤して下駄を作っていたことが記されています。複数の「工場」名が記されていますが、自宅で仕事をしていたという記載は有りません。資料の三年間は他所へ出向いて、下駄作りの仕事を請け負っていました。「工場」名の半数は下駄屋名で、西湊町通の「徳吉」、寄附町の「渡辺熊蔵」、礎町通の「竹内」、医学町の「北村」が載っています。「塩谷」

「村木屋」は同名の店が複数ありますが、いずれも新潟島内の下駄屋です。残りの「工場」も、恐らく市内の下駄屋と思われる。表1に示した通り、数か月連続で同じ下駄屋へ出ることもあれば、逆に二週間程度で別の仕事場へと移ることもあります。

「工場」下駄屋での仕事は、「木挽き」「糸子挽」「七分」「仕上げ」など木取りから仕上げまで全工程に渡ります。下駄の種類は、「男角」「女角」「天子供」「子供」「天目」「日光」等があります。また、この時期の広川氏の支出を記した資料には、下駄作りに必要な道具の購入費が挙げられています。カンナやノミといった道具や、天王寺鋸など木挽きの道具、手入れ用のヤスリなどを月々買い足しています。同氏の現在残っている道具には「廣川専用」という墨書があります。出勤先の他の職人の道具と混用しないための工夫と思われます。広川氏は、下駄屋での仕事の進行に応じて、様々な作業の工程をこなし、色々な種類の下駄を作っており、それに必要な道具を自前で揃え、出勤先の下駄屋へ持参していたことがわかります。なお、ご遺族からお聞きしたところ、第一次大戦頃には、下駄屋からの委託を受けて、自宅の作業場で下駄を作っていたそうです。

以上は、若手故の仕事の仕方かもしれませんが、しかし、下駄屋(足駄屋)の数と職人の数を見ると、嘉永五(一八五二)年「新潟下駄足駄塗物職人家別人数並高凡書付」高凡書付には、足駄を商う家数が四〇軒、職人数二八〇人とあります(表2)。(ただし、元禄十(一六九七)年「新潟江従諸方参候御蔵米并雜穀諸色大積り」には足駄屋八十四人とあり、「新潟市史通史編1」によれば八十二軒あるいは八十八軒と記した近世資料もあります。)明治以降になると、明治三十七(一九〇四)年には製造戸数六〇〇に対して職工数二二〇人、大正二(一九一三)年には六五戸に対して職工数三三〇人です。幕末から大正にかけて、自前の店を持たない下駄職人が相当数いたことは確かです。この職人たちが新潟の下駄の生産を支えていました。昭和の初めには、広川氏のように何軒もの下駄屋に出向いて仕事を請け負う職人が存在していました。(もり ゆきひと 学芸員)

時期	家別	足駄職人(人)	出来(足)	出典	
1852年	嘉永5	40	180	1,100,000	新潟下駄足駄塗物職人家別人数並高凡書付
1904年	明治37	60	120	1,000,000	『新潟市統計一覽 第2回』新潟市役所、明治39年
1913年	大正2	65	230	2,900,000	新潟市『新潟市統計表』大正2年

表2 下駄屋戸数・下駄職人数・下駄製造数の比較

古代のエジプトと日本(一)

二〇〇八年六月五日に特別歴史講座「ナイル世界から西アジア世界へ」古代エジプト王朝の外交と辺境支配」が元信州大学教授屋形禎亮先生を御迎えして開かれました。日本人に絶大な人気のエジプト文明ですが、珍しい高根の花として仰ぎ見るだけでなく、日本史の課題に引きつけ、両地域の共通の課題にそれぞれどのように立ち向かったのかということを比較研究することで、日本の古代の理解を深められないかというのが私の願でした。

古代エジプトは西アジア世界の西南端の孤立した世界でした。エジプトはナイル河谷の東と西は砂漠、北は地中海、南はナイルの急湍に画された南北に長い島のようなものと言えます。エジプトの農耕社会は西アジア中心部からの影響のもとで始まりましたが、大きな外圧を受けることなく、いち早く「統一」を達成し、大ピラミッドに代表される独自の大文明を開化させました。エジプト王朝が西アジア列強の国際競争の場に本格登場するのは新王国以降で、強国ヒッタイトとシリア・パレスチナの支配をめぐって覇を争ったのは有名です。古代の日本は東アジア文明圏の東南端の洋上に孤立する島国で、西方



壁画「ヌビア人の傭兵」
(テーベ シェイクアブド・ドルクナ タヌ二墳墓)
(『世界考古学大系』第13巻、平凡社、1960年)

の中国大陸朝鮮半島から農耕文化を受容しながら、当初は大きな外圧は及ばず独自の文化的政治的発展をとげ、巨大前方後円墳に象徴される統一を達成し、遅ればせながら東アジアの国際関係の中へ参入します。古代日本と古代エジプトではいずれも後背地に広大な辺境が広がっています。アスワンハイダムの近くの第一急湍以南のナイル上流がヌビアで、ヌビア人の征服・同化は第二王朝以来の歴史の治世の重要課題であり、征服地には多数の要塞都市が作られました。ヌビアの物的・人的資源の独占は王の権力の源でした。特に無尽蔵に産出したヌビアの金は西アジアの王侯達の垂涎の的でエジプトの外交カードとして絶大な力を発揮しました。(あまかす けん 館長)

収蔵資料紹介

菖蒲塚古墳 経塚出土品(重要文化財)

銅製の経筒二点、珠洲焼の壺二点、銅鏡五面、中国製青白磁の小壺二点、同合子二点、勾玉二点、管玉七点。これらは菖蒲塚古墳経塚出土品として国の重要文化財に指定されています。このうち勾玉二点、管玉七点は、経塚として再利用された菖蒲塚古墳に伴うものです。勾玉・管玉が納められた古墳は四世紀後半の古墳時代前期の築造と考えられており、その後、平安時代末から室町時代にかけて経塚に利用されました。

また、青白磁の小壺と合子は景德鎮で焼かれたもので、これらの副納品はいずれも平安時代後期にさかのぼります。これまで一般に公開されることがほとんどなかったこれら菖蒲塚古墳経塚出土品については、当館で預かることになったことを機に、今後、展示紹介していきたいと考えています。

これらの資料は、西蒲区竹野町の金仙寺が所蔵し管理していたものです。寺の保存環境にも限界があり、重要文化財の管理に支障をきたす恐れがあることから、このたび一時的に当館で保管・管理することにになりました。これらが出土した菖蒲塚古墳は国の史跡に指定されています。全長五三メートルの前方後円墳で、



檀家さんへのお披露目

■参考文献
『巻町史 資料編二』巻町一九九四
『巻町むかしむかし 巻町双書 第四〇集』巻町教育委員会二〇〇五
小林 隆幸 学芸員